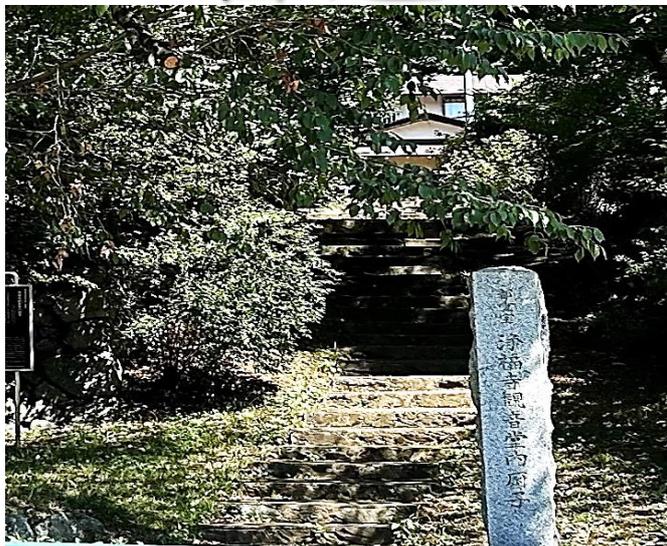


八碁連だよ

令和5年9月号

第383号



浄福寺（城跡）の山門（下恩方町）

発行日 令和5年9月1日(金)

発行所 八王子囲碁連盟

住所 八王子市大和田町 6-3-29-1119

電話 042-646-0783

発行者 池田 正三

編集者 荒畑 昭一



<https://hachigoren.com>

八王子囲碁連盟



巻頭言

川端康成と本因坊秀哉



大和田囲碁同好会会長 成田 滋

「時は過ぎゆくにあらず、われら過ぎ去るなり」といったのは文豪川端康成。「月日は百代の过客にして、古人も多く旅に死せるあり」と綴ったのは松尾芭蕉です。

私は文学に登場する「時」と「死」と「碁」の世界を調べていくうちに新潮社版の「名人」という小説に出会いました。「名人」とは第二十一世本因坊秀哉のことです。

「過ぎ去る」人物の主人公はこの人です。川端は東京日日新聞、現在の毎日新聞から1938年に開催された名人の引退碁の観戦記を依頼されます。この観戦記を1942年に小説風書き改めたのが「名人」です。

小説に登場する名人の相手は「大竹七段」で、この引退碁での実際の相手は木谷實七段です。この時、本因坊秀哉は64歳、木谷は29歳、川端は40歳でした。

川端にとって碁は「遊び」であるゆえに、人間の純粋な行為であり、無意味であり、

人生を象徴するというのです。碁は抽象性、非功利性がはっきりしていて文学もほぼ似たようなものであるというのです。非常に難しいレトリックです。

「遊び」の本質とは「自由な活動」で「隔離された行動」、そして「非生産的な活動」と書いたのはフランスの思想家ロジェ・カイヨワです。碁はカイヨワの指摘する遊びの要件をすべて満たしています。

カイヨワが「遊びと人間」という本を出版したのは1958年ですが、川端はそれ以前に小説「名人」を書いています。若い時から碁に親しみ、文壇の囲碁仲間内でも「打ち手」として知られていた川端は、とりわけ本因坊秀哉を「敬尊」していたと自らが書いています。

名人には、敗着そのものへのこだわりは薄く、勝負には負けても「芸術としての棋面」を創ろうとしたその姿勢に「精神の高雅さ」を見るというのです。

理事会議事録(抄)



令和5年度第4回理事会議事録

日時：令和5年7月29日（土曜日）9時30分～12時00分

場所：大横保健福祉センター 第1会議室（1階）

出席者：池田、澤田（議事録作成）、木村、端山、荒畑、金本

会長報告

- ・7月16日、午後、大和田市民センターで八碁連HPの運営について、候補者脇氏及び成田氏、池田の3人で業務内容について、打合せしたが、不調に終わる（HPのソフトウェアwordpressへの対応）。専門業者にHPの再構成を含め依頼したほうが良いとのアドバイスがあったところ。
- ・6月30日、多摩地区市町対抗囲碁団体戦の会場「いちょうホール」の下見。7月22日、「いちょうホール」の担当者との打ち合わせ実施。
- ・7月24日、八王子市及び八王子市教育委員会へ子ども囲碁大会の後援申請及び教育長の開会式出席・挨拶依頼を提出。7月27日、東浅川保健福祉センター館長へ子ども囲碁大会の出席を要請。
- ・多摩地区市町対抗囲碁団体戦第2回準備検討委員会、本日、午後、大横保健福祉センター（第3会議室）で開催。

各理事報告

- ・地区団体戦の参加チームが確定、23チームの参加なので、不戦敗を防ぐため、連合チームを八碁連主体で選出
- ・こども囲碁大会の競技ルールー及び昇段昇級ルールについては、別途討議事項の中で審議。
- ・来年2月4日のタイトル戦、2月11日の女性囲碁大会については、8月に東浅川健康福祉センターの先行予約を行う。
- ・会費（前期分）は1同好会除き納入済。（納期限7月末）、研修部の会費は従来通り納入予定。

議案討議事項

- 1 子ども囲碁大会の実施要綱案及び競技・昇段昇級ルール、準備作業について
原案どおり実施要綱、チラシ、競技・昇段昇級ルールが決定。今後、準備作業の役割分担表に基づき、対応することで決定。8月末の締め切り後、打ち合わせを予定。
- 2 八碁連HPの運営について
脇氏との打ち合わせが不調に終わり、アドバイスも踏まえ、HP作成に経費が掛かっても専門業者に発注することを前提に継続検討して、年末予定の会長会に諮る。
- 3 多摩地区市町対抗囲碁団体戦準備作業及び当日の業務について
準備作業等については、本日、午後の第2回準備検討委員会で検討。
八碁連理事、関係同好会、大会事務局も交え、囲碁用具運搬、会場設営・撤去、競技運営等各担当業務の内容、各同好会からの協力など多岐にわたり検討。

お知らせ

第31回活きいき大会のご案内

活きいき大会の「川口大会」は「中止」となりました。

令和5年10月8日（日）開催予定の『川口大会』は、地元商店街等のイベントと重なり、会場確保が困難となり「中止」せざるを得ないこととなりました。会員各位には

大変申し訳ありませんが中止のご連絡を申し上げます。

★第5回多摩地区市町対抗囲碁団体戦結果決まる

8月20日(日)、「いちようホール」において、第5回多摩地区市町対抗囲碁団体戦が開催されました。

今回は、22チーム(団長及び選手9名)の参加で熱戦が繰り広げられました。小ホールで9時30分から開会式が行われ、来賓の石森八王子市長から激励の挨拶があり、いちようホールの設楽館長の挨拶と続き、その後、主催者である大会実行委員会成田会長の挨拶、プロ棋士の首藤八段(審判長)、熊丰(ユウ ホウ)七段、甲田四段の紹介及び挨拶がありました。

大会ルール説明後、10時から2会場に分かれて対局が開始され、各チームの選手も真剣な表情で碁盤を見ながら、打つ手を思案している様子でした。



開会式風景

八王子チームも精鋭メンバーで臨み、初戦、町田市に5-4で勝利し幸先が良かったのですが、2回戦、東久留米市に3-6で負け、3回戦、立川市に3-6で負け、最後の4回戦で小平市に5-4で勝利し、最終的にチームとしては2勝2敗の成績で13位となりました。来年に向け捲土重来を期待したいと思います。

個人賞では、3将の金本様(石川)が4勝で全勝賞を受賞され、見事な活躍をされました。

指導碁は別室で行われ、4人のプロ棋士(ラフィフ二段含む)が午前1回、午後2回に分けて対局を指導され、八碁連からも数名参加されました。

対局終了後、お楽しみ抽選会でプロ棋士サイン入りの扇子や色紙、囲碁の書籍など抽選で選手に配布されることから盛り上がるイベントになりました。

表彰式では、団体賞として優勝 国立市、準優勝 立川市、3位 武蔵野市、飛び賞(15位) 多摩市が表彰され、個人賞は全勝賞、シニア賞など表彰されました。

首藤八段の講評の後、閉会となりましたが、この大会で多摩地域のお年寄りから子供

まで囲碁を通じて交流が図られたことは意義あることと考えます。

今回、八碁連として、会場設営や囲碁用具の準備、大会運営協力等を行いました。各同好会の皆様のご協力で無事大会を終えることができ、関係者に感謝申し上げるとともに、少しでも囲碁普及、交流に役立てたのであれば八碁連としても喜ばしい限りです。



対局風景

投稿

第16回ロッテ杯こども囲碁教室団体戦チャンピオンクラスに出場

日本棋院八王子支部 観戦者 普及指導員 帖地美乃里

令和5年7月17日〔海の日〕に日本棋院で開催された標記の大会の観戦記です。

チャンピオンクラスに出場したチームは、日本棋院八王子支部を含め市川道場（三村智保九段）、洪道場、緑星囲碁学園、岩田子供教室、麻布学園などプロ棋士や院生を輩出している強豪12チームです。我が八王子支部は次の3名で臨みました。

大将 三木幸翼 高校2年

次将 伊藤章紘 小学4年

三将 市川陽翔 中学2年

手合いはオール互先で2勝すればチームの勝ち点となります。

八王子支部の対戦結果ですが、1回戦は洪道場に2勝1敗、2回戦は麻布学園に2勝1敗、3回戦は緑星囲碁学園に2勝1敗と3連勝です。4回戦は3勝同士の市川道場で

す。1勝1敗で優勝は次将伊藤君の結果次第となりました。

大勢の観戦者の見守る中、残念ながら惜敗し優勝はできませんでした。順位は3勝1敗が3チームあり、個人の勝数、負数の差で4位となりました。団体戦では3勝同士で優勝をかけて戦ったのですから負けた八王子支部が準優勝と思いましたが、大会の規定で4位は仕方ありませんでした。

市川君が4勝し個人全勝者賞を貰いました。驚くべきは伊藤君と市川君の2人は倉内教室で指導を受け、この2年弱で棋力七段という稀にみる上達のスピードです。

2人は7月から岩田子供教室(岩田九段)に入門し、プロを目指すと言いました。この大会参加は幸先のよい門出になったと思います。これからも2人の精進を願うばかりです。

【編集後記】

一国一城とはよく言う言葉ですが、八王子には、なぜにこの様に「お城」が多いのでしょうか。

本誌でも、滝山城、八王子城、片倉城、浄福寺城と写真紹介しましたが、まだ未紹介のものがあります。どれもみな、「山城」で戦国時代の「戦さ」の有利性を考慮した山のでっぺんに造られています。

よって、天守閣の城跡はなく、今は、「ここに、本丸があったらしい!」「ここに、二の丸があったのか?」と山の中の広場で想像するしかないのです。

この夏は、冷房の効いた対局室で囲碁を楽しむのもまた格別でしたが、出かける準備や道中の暑さに、二の足を踏む方も少なくなかったことでしょう。

山と川に囲まれた下恩方町にある「浄福寺」(右)(この寺の裏山に、浄福寺城があった。)、戦国の戦いなど、思いもさせない風光明媚な土地柄で、時代の流れを感じさせる所でした。(S.A)



